

## 東信地方の打製石斧石材について

### —縄文時代石器石材の一様相—

川崎 保

I はじめに

III 千枚岩質粘板岩製打製石斧の分布

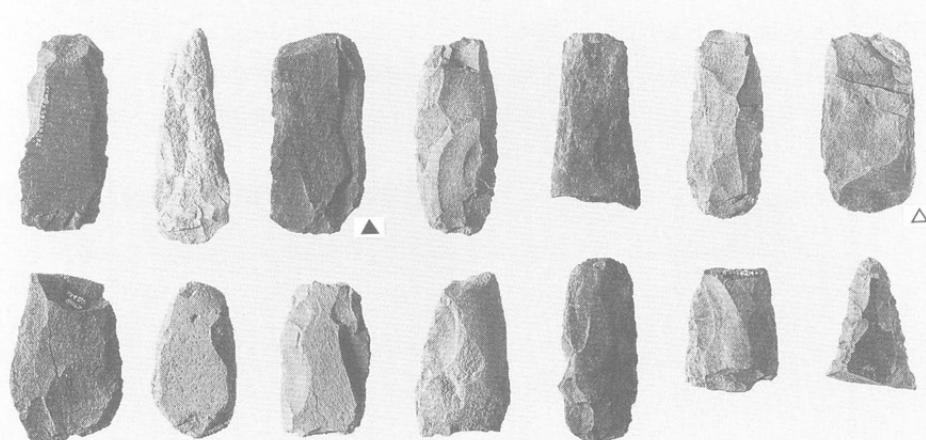
II 千枚岩質粘板岩同定の過程

IV まとめ

#### I はじめに

千曲川流域はもとより中央高地では、前期より打製石斧が出現し、中期の遺跡ともなるとかなりの数の打製石斧が出土することが、よく知られている。まさに打製石斧は中央高地の縄文遺跡には欠かせない器種である。しかし、縄文時代の打製石斧は多く発掘されている割りにはその石材の同定さらには流通の経路などはよくわかっていない。

現在分析中の烏帽子岳西南麓に位置する東部町の縄文時代の遺跡群から多くの打製石斧が出土しているが、これを山岸猪久馬氏(地質学)に鑑定していただき、検討を加えた。その結果おおよその使用石材の様相が判明してきた。例えば山越遺跡出土の打製石斧では千枚岩質粘板岩が多く、第三系黒色頁岩(別所層)はわずかに用いられているようである(図1 山越遺跡出土打製石斧写真▲黒色頁岩 △千枚岩質粘板岩)。千枚岩質粘板岩が打製石斧に多く用いられているという傾向は、詳細な数値は現在未算出であるが、山越遺跡のほか中田遺跡、真行寺遺跡群、桜畠遺跡、細田遺跡、森下遺跡、中原遺跡群でも看取することができた。



▲印が第三系黒色頁岩(別所層) △印が千枚岩質粘板岩

図1 山越遺跡出土打製石斧

こうした烏帽子岳西南麓に位置する東部町所在の縄文時代の遺跡群は整理中で数量的なデータなど未確定な部分も少なくないが、現段階で判明した事実だけでも従来知られていなかった部分を含んでおり、本報告に向けて大方の叱正を期待し、新知見を紹介したいと思う。以下千枚岩質粘板岩の同定の過程に触れ、その上で千枚岩質打製石斧の意味を考えてみたい。

## II 千枚岩質粘板岩同定の過程

この千枚岩質粘板岩と呼ぶ石材は、遺跡から出土したもの多くは表面が白く風化し、一見粗粒の石材にも見えるが、風化していない内部や新欠部分は黒く緻密であり、石材全体が千枚岩ほどではないが片理にそって薄板状に割れやすい性質をもっている。

しかし、当初より千枚岩質粘板岩が打製石斧に多く用いられているという認識があったわけではない。筆者はこの石材を佐久地方に広く利用されているという黒色で緻密なガラス質安山岩か第三系の別所層など頁岩や泥岩かではないかと考えていた。

そこでまず佐久地方のガラス質安山岩を検討したのだが、これについては岩石学的な見地から山本薰ら(1997)が、考古学的見地から堤隆(1997)の研究がある。筆者もこうした研究を踏まえて佐久の「八風山型」ガラス質安山岩と長野・新潟県境に多く産出する「ツメ石型」ガラス質安山岩との比較や八風山に隣接する物見岩の玄武岩の現地調査を行なった(川崎1998a)。

たしかに山本らも指摘するように「八風山型」や「ツメ石型」ガラス質安山岩(註1)どうしの比較はなかなか肉眼や岩石剥片の偏光顕微鏡による観察のみでは難しい面もあるが、いずれも黒色で緻密である。また新鮮な破断面は貝殻状断口を呈し、少ないながらも斜長石を中心とする斑晶が肉眼でも確認できるし、これらガラス質安山岩には千枚岩質構造が見られることはない。よってこうしたガラス質安山岩は烏帽子西南麓の東部町の遺跡群出土の打製石斧にはあまり用いられていないことがわかってきた(図2・3八風山型ガラス質安山岩剥片写真)。

次に第三系頁岩であるが、使われていないことはない(図1-▲印)。例えば別所層の頁岩は黒色で堅緻であり、節理ではがれやすい特徴をもっている。そして何よりも魚の鱗の化石を多く含んでいる(図4山越遺跡打製石斧拡大写真、図5別所層黑色頁岩拡大写真)。

こうして、ガラス質安山岩や第三系の頁岩などではないことが推測され、石材が非常に堅緻

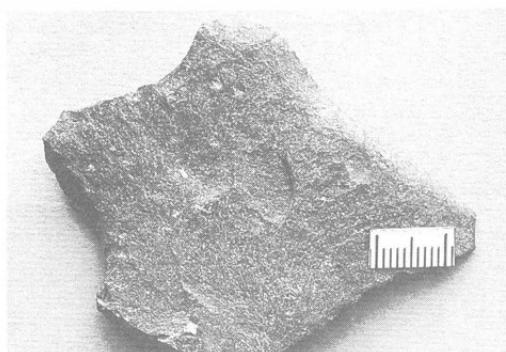


図2 桜畠遺跡出土ガラス質安山岩製剥片

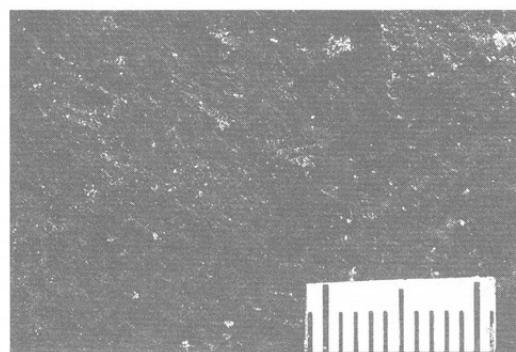


図3 ガラス質安山岩製剥片拡大写真



図4 山越遺跡打製石斧拡大写真（3倍）

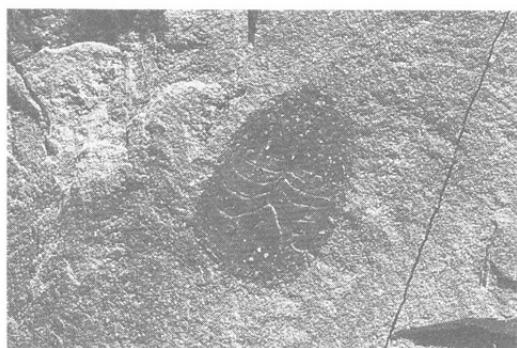


図5 別所層黒色頁岩拡大写真（3倍）

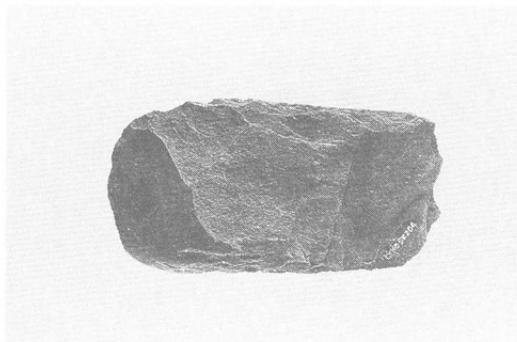


図6 山越遺跡千枚岩質粘板岩製打製石斧



図7 同側面写真

であることや千枚岩質構造をもつことから、関東山地などの先第三系の岩石ではないかと考えるに至った。

上小地方において打製石斧に「千枚岩」が使われていることについてすでに丸子町渕ノ上遺跡の報告書(綿田1992)にて紹介されている。綿田は「打製石斧」のうちいくつかは「細粒砂岩」「千枚岩」で「ともに関東山地に産出されるため、入手経路に興味をもたれる」としている(註2)。

やはりこの石材の特性を考えてみると、堆積岩とすれば第三系のものより堅緻であり、くり返しふれるが千枚岩構造の発達が著しい。以上のことから産地の一つの候補として関東山地の先第三系の地殻の構造運動の影響を受けた石材ではないかと考えた(図6・7山越遺跡千枚岩質粘板岩製打製石斧写真)。そこでこの岩石を、関東産地の先第三系の地質を研究されている小泉潔氏に鑑定を依頼した。

非常に限られた資料であり、風化が著しく同定不能のものも少なくなかったが、小泉氏によると「粘板岩としたものは、関東山地の中の中・古生界(いわゆる秩父“古生層”)起源のものと見て良いのではないか」との鑑定をいただいた。(註3)

### III 千枚岩質粘板岩製打製石斧の分布

現在東部町の縄文時代遺跡群からは、千枚岩質粘板岩製の石器は、細片になって器種がわか

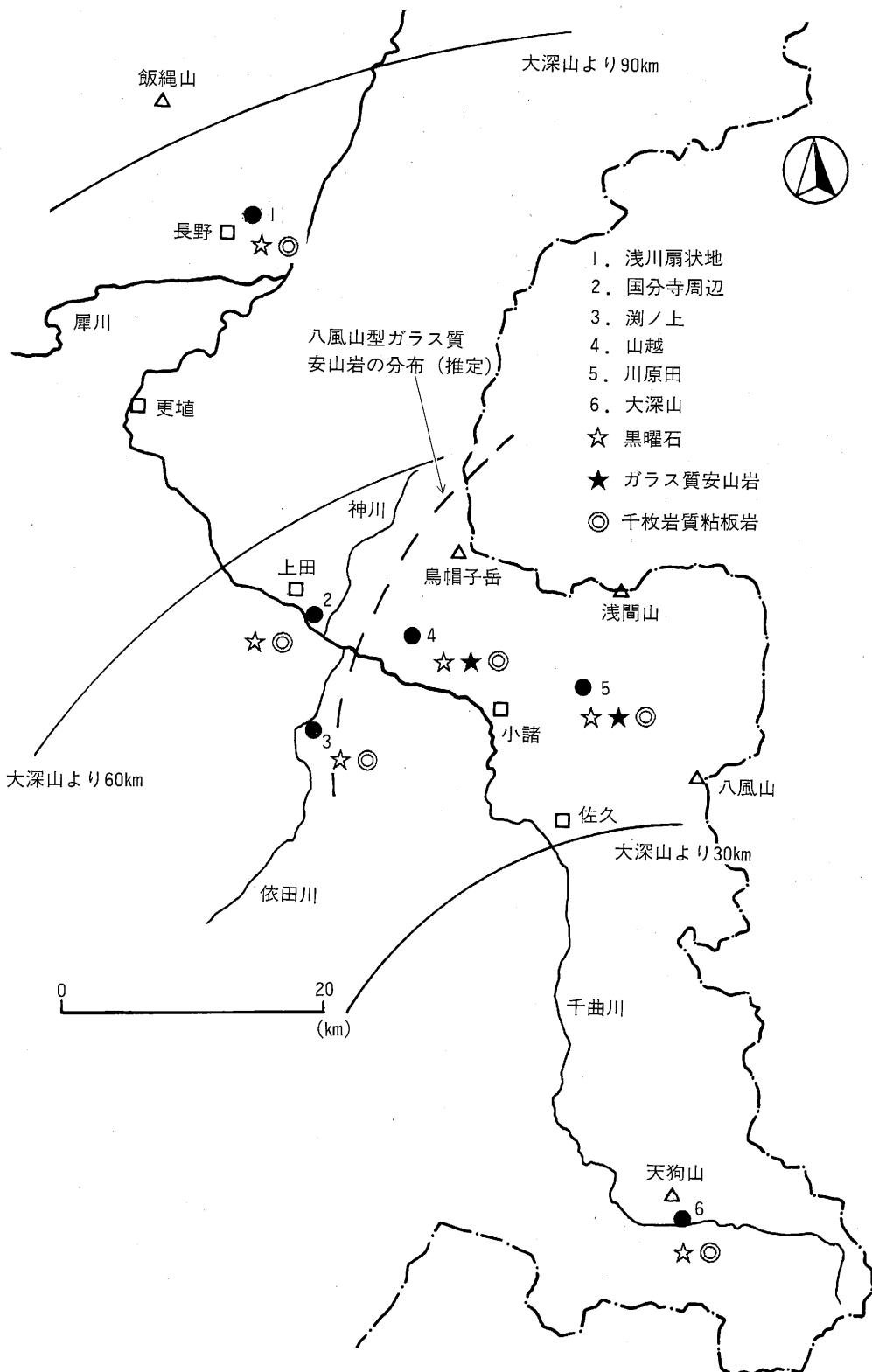


図 8 遺跡位置及び石器石材分布図

らないものを除けば、ほとんど打製石斧にしか用いられていない。勿論同定作業が進めば新たな器種に用いられている可能性もあるが、東部町のこれらの遺跡群の打製石斧多くが千枚岩質粘板岩で作られている傾向は変わらないと思われる。

そこで、実際に千曲川流域の遺跡群の打製石斧の石材がどのように用いられているかを、以下の遺跡で観察してみた。

・南佐久郡川上村大深山遺跡(縄文時代中期) (図8) (八幡1976)

千曲川上流右岸の天狗山南斜面の標高1300m台のやや平坦な場所に大深山遺跡は立地している。

報告書によれば、12号住磨製石斧(緑泥片岩)、石鏃(黒曜石)、47号住乳棒状磨製石斧(緑泥片岩)、板状斧(蛇紋岩?)、石鏃(黒曜石)、凹石、磨石、石槌(花崗岩)などの記述はあるが、遺跡内で330本と多量に出土した打製石斧(図9)の石材についての記述はない。筆者と山岸氏とで大深山考古館の資料(一部)を見学させていただいたものは、千枚岩質粘板岩ないしさらに片理がはっきりした千枚岩や結晶片岩製のものが存在したが、時間的な制約もあり量的な割合など詳しいことはわからなかった。

・北佐久郡御代田町川原田遺跡(縄文時代前期～中期) (堤1997)

川原田遺跡は千曲川の右岸、浅間山南麓の細い尾根の上に立地している(図8)。

堤が詳細な石器石材の詳細な研究をしている。堤によれば前期の石材としては黒曜石、

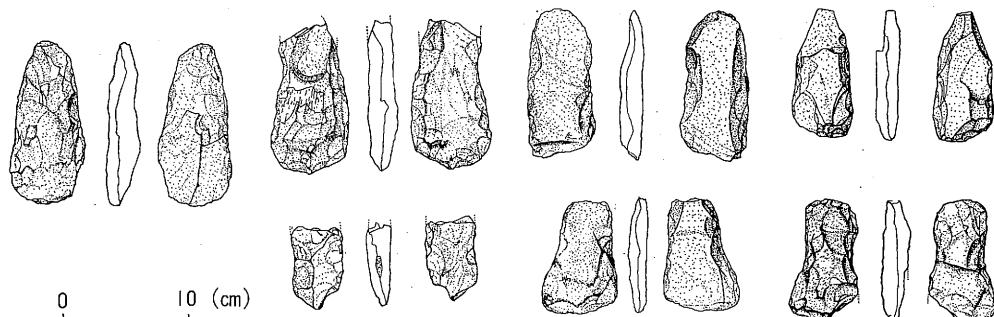


図9 大深山遺跡出土打製石斧

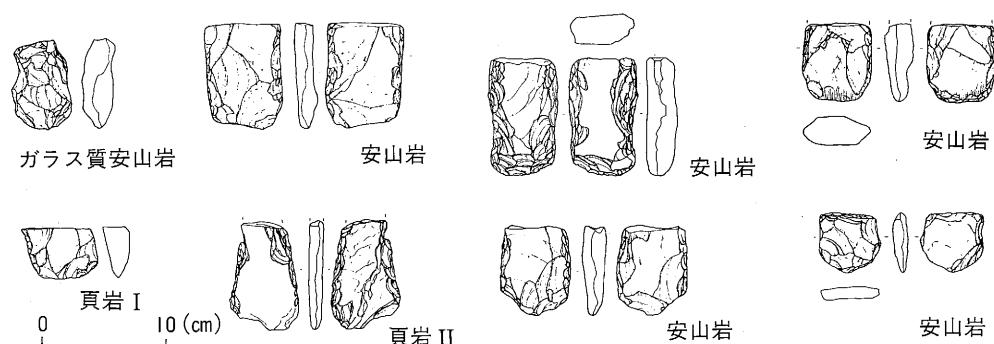


図10 川原田遺跡J-12号住居址(中期中葉)出土打製石斧

チャート・硬質頁岩・頁岩・ガラス質黒色安山岩・ホルンフェルス・凝灰岩・鉄石英があり、中期は前述の石材以外に磨石、凹石、敲石のすべてと、石皿の大半が安山岩である。さらに磨製石斧の石材として蛇紋岩、石皿の石材として緑泥片岩が極少量加わるに過ぎない。

さらに川原田遺跡の中期の打製石斧は堤によれば頁岩1点、頁岩I 25点、頁岩II 10点、ガラス質黒色安山岩3点、ホルンフェルス9点、凝灰岩4点、安山岩50点、緑色片岩1点、グリーンタフ2点であるという(図10)。

川原田遺跡の資料も短時間に見学させていただいただけなので、厳密に分析できたわけではないのだが、表面が白く風化しているのに、内部は黒く緻密であり、片状構造が発達する頁岩IIなどとされる石材があり、これらは筆者が千枚岩質粘板岩と呼ぶ石材と同じである。しかし、頁岩IIイコール千枚岩質粘板岩かは不明である。

#### ・国分寺周辺遺跡群(縄文時代中期～後期) (柳沢ほか1998)

国分寺周辺遺跡群は千曲川右岸の低位段丘の上に立地している(図8)。

遺構に伴うような形で縄文時代の石器が出土しているわけではないが、遺物包含層などから共伴した縄文土器の様相から考えて、当該期の石器と判断した。石器石材の詳細な内容は本報告に譲るとして、磨石、台石は安山岩、閃綠岩、石鎚などの剥片石器には黒曜石、チャートが用いられ、打製石斧は千枚岩質粘板岩が大半を占めた。ガラス質安山岩は皆無である。

#### ・長野市浅川扇状地遺跡群(縄文時代中期～後期) (上田ほか1998)

千曲川左岸の浅川扇状地に立地している(図8)。

この遺跡の石器も遺構に伴う形で石器が出土しているわけではないが、縄文土器の主体は中期から後期なので、石器の大半もこの時期のものと考えられる。石器石材の詳細な内容は本報告を参照して頂きたいが、打製石斧は千枚岩質粘板岩が大半を占めた。この遺跡の千枚岩質粘板岩はいずれも風化の著しいものが多く、ほとんど灰白色のやや粗粒の石材と見まがうものがある。

## IV まとめ

ここに、紹介した遺跡は必ずしも千曲川上中流域を代表するような縄文時代遺跡ではなく、筆者がたまたま石器石材に注目して観察した遺跡にすぎない。よって、石器石材の所属時期も必ずしもある特定の時期に限定できない。当然今回対象とした資料には前期から後期の資料を含む可能性はある。また烏帽子岳西南麓の東部町の山越遺跡や真行寺遺跡群などの石器石材の同定もようやく半分程度が終了しただけで、まだ完全に全体像をとらえた訳ではない。よってこの時点で縄文時代千曲川流域の石器石材の様相について語る等おこがましいかもしれない。しかし、これだけの情報からでもいくつかの新しい知見が得られた。

- (1) 千枚岩質粘板岩製打製石斧の分布は、黒曜石程ではないが、ガラス質安山岩よりかなり広い(図8)。
- (2) 定量的な分析を十分にまだ行なっていないが、打製石斧の石材に関して言えば、御代田町川原田遺跡は石材が多様であるのに対し、烏帽子岳西南麓の遺跡は比較的千枚岩質粘

板岩や硬砂岩(いずれも先第三系)が卓越している(表1)。

また今後の課題として、さらに千枚岩質粘板岩製打製石斧の分布を明らかにすること。(千曲川下流や犀川流域等にも広がるのか。上田・長野間の遺跡の様相はどうなのか) こうした上で鳥帽子岳西南麓の遺跡群だけでなく、千曲川流域の縄文時代遺跡群での様相をより細かい時間軸で把握すべきだろう。

謝辞：本稿を作成する上で、日ごろから地質学全般に関する助言をいただき、また石器石材の同定をしていただいている理学博士山岸猪久馬氏、先第三系の石材について分析していただいた東京都立永福高校の小泉潔氏、並びに新潟県の現地を案内いただいた新潟県山本中学校の渡辺秀男氏には心から御礼申し上げ、また、以下の諸氏には資料の観察、文献の紹介、石器石材の撮影等で多大なご協力をいただきましたので、お名前を記して感謝します。

堤隆、上田真、柳沢亮、広瀬昭弘、田村彬、小池波三（順不同）

(表1)

遺跡名／石材	千枚岩質 粘板岩	硬砂岩	凝灰岩	頁岩	ガラス質 安山岩	安山岩	ヒン岩	その他	遺構の時期
中田	2	4				1	1		中～後期
真行寺	9	2		1		1		1	前～中期
桜畠	8	1		1				1	前～中期
山越	21	3			1	1		2	前～後期

おそらく打製石斧の破片と思われるようなものでも、刃部ないしは基部のみの小破片は省いてある。遺構の時期はその遺跡で検出されている主な遺構(住居址、土坑)の時期であって、必ずしも打製石斧の時期を示してはいない。硬砂岩、凝灰岩としたものもいずれも先第三系のものと考えられ、千枚岩質粘板岩と区別が難しいものも含まれる。

#### 註

- 註1 八風山型、ツメ石型の呼称は山岸猪久馬氏の指摘による。
- 註2 石材の鑑定は山岸猪久馬氏による。
- 註3 小泉潔氏が個別の石材をどのように鑑定したかなど詳細は本報告書に掲載予定。

#### 引用参考文献

- 上田 真ほか1998『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書5』(浅川扇状地遺跡群ほか)助長野県埋蔵文化財センター
- 植村 武1988「総説」「日本の地質4 中部地方1.」共立出版
- 川崎 保1997「中田遺跡・中原遺跡ほか」『長野県埋蔵文化財センターヤー報13 1996』
- 川崎 保1998 a 「東部町祢津真行寺遺跡群出土の石器石材」『佐久考古通信』72
- 川崎 保1998 b 「真行寺遺跡群・中原遺跡群ほか」『長野県埋蔵文化財センターヤー報14 1997』
- 武井 朔1986「中・古生界1.2関東山地(1)概説」『日本の地質3 関東地方』共立出版

- 堤 隆1994「前期初頭と前期中葉の石器について」『塙田遺跡』御代田町教育委員会  
堤 隆1997「川原田遺跡縄文前・中期の石器について」『川原田遺跡』御代田町教育委員会  
柳沢 亮ほか1998『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書2』(国分寺周辺遺跡群ほか)助長野県埋蔵文化財センター  
山本 薫・高松武次郎1997「縄文時代前・中期の浅間山麓塩野西遺跡群における石器石材の入手について」『川原田遺跡』御代田町教育委員会  
八幡一郎1976『大深山遺跡』川上村教育委員会  
綿田弘実1992「石器」「渕ノ上遺跡」丸子町教育委員会

**図表の出典など**

- 図1 山越遺跡出土打製石斧 (1/4倍)  
図2 桜畠遺跡出土ガラス安山岩製剝片 (4/9倍) 1目盛りが0.1mm  
図3 桜畠遺跡出土ガラス質安山岩製剝片拡大写真 (2倍)  
図4 山越遺跡出土打製石斧拡大写真 (3倍)  
図5 別所層黒色頁岩拡大写真 (3倍) 上田市富士見台採取  
図6 山越遺跡千枚岩質粘板岩製打製石斧写真 (4/9倍)  
図7 山越遺跡千枚岩質粘板岩製打製石斧拡大写真 (4/9倍)  
図8 遺跡位置図及び石材分布図 50万分の1 川崎作成  
図9 大深山遺跡出土打製石斧(約1/6) (八幡1976) より川崎改変  
図10 川原田遺跡J-12号住居址(中期中葉)出土打製石斧(1/6) (堤1997) より川崎改変  
図1・4~7は田村彬氏の撮影、図2・3は山岸猪久馬氏の撮影による